No.164　Solid papillary carcinoma　　JCHO 熊本総合病院　寺園 広太

① 症例：50 歳代　女性

② 既往歴： 特記事項なし

③ 臨床経過：検診 MMG にて左上部に C3 の判定で当院受診。US 上では左乳房 C 領域に 8.3×7.3ｍｍの腫瘤を認め、悪性も疑われるため穿刺吸引細胞診を施行。

④ 検体・材料：左乳房・穿刺吸引細胞診

⑤ 細胞診所見：Pap 染色において、弱拡大では腫瘍細胞が不規則重積性のある大小の細胞集塊として出現しており、血管結合織を軸とする乳頭状集塊もみられた。また、強拡大ではシート状～一部重積性に出現する細胞集塊を認め、筋上皮細胞の付着は認めず、腫瘍細胞の結合性の低下により孤立散在性に出現する腫瘍細胞も混在した。腫瘍細胞は小型類円形核、細顆粒状のクロマチンパターンを呈し、核偏在傾向、好酸性・細顆粒状細胞質、単調な出現パターンは、神経内分泌腫瘍を示唆する所見であった。

⑥ 組織所見：大小の拡張した乳管内に限局し、乳管上皮性異型細胞が主として充実性から一部篩状構造を呈して多結節性に増殖していた。腫瘍細胞は核異型度が低く、核分裂像も目立たなかった。また、好酸性顆粒状の細胞質を有する腫瘍細胞もみられた。これらの所見より神経内分泌系の腫瘍を鑑別に挙げ、免疫染色を追加検討すると、Synaptophysin, Chromogranin A, CD56 がいずれも強陽性であり、非浸潤性乳管癌の組織亜型：Solid papillary carcinoma in situ (Endocrine DCIS)と診断した。

⑦ 鑑別点：乳管内での乳頭状，充実性の増殖がみられるため、Papillo-tubular carcinoma や Solid-tubular carcinoma との鑑別が重要になるが、血管結合織を軸とした乳頭状配列や核が偏在した形質細胞様の腫瘍細胞が単調かつ孤立散在性に増殖、低異型度の核と好酸性顆粒状の細胞質から神経内分泌腫瘍を積極的に示唆させる細胞像として認識する事が大事である。